

〔館員随想〕

文物が作る社会 —中華の宝、台湾の誇り：故宮博物院80周年「大観」展参観記—

「美のたより」No.74(1986年)には、当時学芸部部員であった藤田伸也氏(現任三重大学)による、台北・故宮博物院60周年記念展への参観記が掲載されています。それから台湾社会も大きく変わりました。今年80周年を記念する北宋美術の大展覧会「大観」展が台北の故宮博物院で開かれ(図1、3)、范寛「溪山行旅図」、郭熙「早春図」、李唐「万壑松風図」を含む名品が一堂に展示されました。

故宮博物院は1925年、それまで清朝皇室のもっていたコレクションを国民に公開するために北京に建院されました。日本軍が中国に侵攻すると、故宮文物は南方に疎開させられ、国共内戦後の1948年、国民党の遷台とともに、主要文物は台湾に移りました。その後台北市郊外に現在の国立故宮博物院が開館したのは1965年の事でした。

台湾島の歴史は古く、その文化は豊かです(図6)。山岳部にはいくつもの固有の文化を持った先住民族が住み、オランダ統治と鄭成功政権時代を経て、1683年からは清朝の領土となります。この時代は対岸の福建から多くの中国人移民がやって来ました。1895年からは日本時代になって多くの

日本人が移り住み、その統治は50年に及びます。蛇足ですが、私の祖母の一族もその中にいました。1949年以降は国民党政権の遷台にともない、200万ともいわれる中国人が移り住みました。この中に、故宮の文物もあったのです。

中国は巨大で、その文化や言葉は地方によって全く異なります。台湾の場合、様々な移民による文化の混交がその特徴です。そこに、中華文明のエッセンスたる皇帝コレクションがやって来ました。故宮文物こそ近代台湾が受け入れた最大の移民であったと言ってもよいでしょう。

高温多湿の地から文物を保護するため、故宮の職員は情熱を注ぎます。この長年の努力の過程こそ台湾の誇りと呼ぶにふさわしいものです。まず重要なのは文物を管理する人間の養成です。その為にまず大学に専門の課程をつくり、長年管理に携わってきた人たちの智慧と経験が継承される仕組みを作りました。それまで台北



図1 故宮の正面



図2 徽宗皇帝のバス

帝国大学の時は人類学系に考古が含まれていたのに対し、1971年には新制台湾大学に芸術史の大学院が開設されます。その後多くの人材を欧米や日本に送り出し、中国の伝統だけではなく、常に新しい研究成果が台湾にもたらされました。さらに重要なのは研究誌の発刊と展覧会の開催です。展示は観者に自分たちの歴史と文化を認識させる重要な手段であるからです。

80周年を機に行われた大規模なリニューアル工事では、かつて正面大ホールにあった中華民国建国の父・孫文像が移動され、清宮文物の中から台湾史に関する文物の陳列コーナーも設けられました。今回は市内を徽宗皇帝のポスターを貼ったバスも走り回り(図4)、毎日非常に多くの人が参観に訪れていました。その中でも印象深かったのは中高大学生の姿が多かったことです。聞き耳を立ててみると「これ教科書で見たことある」(図4)、「ああ、これ蘇東坡の書だ」(図5)などと口々に感想を述べあっていました。質の高い文物はただそこに在るだけではなく、研究され、展示されることによって、社会をも作り出す力を持っているとも言えるでしょう。

今回はさらに北宋美術に関する国際シンポジウムも開かれました。日本以外のアジア美術は、かつて本国以外の外国の方で盛んに研究が行われた時代がありました。中国美術も例外ではなく、その名品は世界中に散在しその研究者も世界中に散らばっているのです。絵画、書法、器物の四日間に渡るシンポジウムの中で、私が一番感じたのは「モノを見る眼」についてです。

美術鑑賞というのはその人の生まれた文化背景や思想を一番強く反映します。そのため、ある人にとっては名



図3「故宮再啓・震古鑠今」

品でも、違う人にとってはそうではないということがあるのです。果たして名品は国境を越えるのでしょうか?例えば中国人にとっての価値の体系があるとしたら。それは書画と青銅器と玉器などを芸術の頂点とする美のヒエラルキーです。これを仮にChinese eyeと呼びましょう。ところが、中国美術が部分的に流出した国々でその体系は通用するとは限りません。なぜならその国にはその国独自のeyesがあるからです。ではどのような「眼」で中国美術を鑑賞したらよいのでしょうか。中国美術研究という国際的な学術領域では常にこの問題がとりだされます。一つの作品の前に立つとき、各国の研究者で制作年代を含め意見が全く異なることが度々ありました。Chinese eyeだけが正しいとは言いつても言い切れません。実はこのことこそが、美術史家のアイデンティティーにもかかわるような多くの議論を生み、互いの文化の深層をより理解することを要請するのです。このような違った意見の交錯が、国際美術としての中国美術研究の醍醐味の一つでもあります。

今台湾社会では文物の新たな価値付けが模索されています。故宮文物以外にも、清朝時代の寺廟建築や日本統治時代の絵画には、台湾社会を語る上でかかせない重要な意義が潜んでいます。それを重要だと認識する「眼」は、台湾人のものです。これから中国美術をめぐる人々の「眼」はどのように変化していくのでしょうか。中国美術の数々の名品を預かる大和文華館も、その大きな動きと無縁ではいられないでしょう。生きた美術として社会に大きな影響を及ぼし続ける中華文物の歴史は、今始まったばかりなのです。(学芸部塚本磨充)

図4 郭熙「早春図」

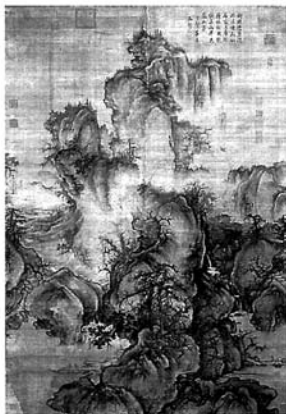


図5 蘇軾「黄州寒食詩卷」



図6「フォルモサ海島図」(1640年頃、オランダ)

